

知的障害者のきょうだいの進路選択 ーライフストーリーに着目してー

松田 菜央

「きょうだい」とは、障害者（児）の兄弟姉妹のことを指す。青年期のきょうだいを対象にした先行研究は、きょうだいを「支援の対象」とみなし、支援を行う人々に向けて有効な支援の在り方を提示するものである。しかし、きょうだいは「障害者」とも「障害者の親」とも「社会の視線」とも異なる、独特なポジショナリティを有している。本研究の目的は、進路選択という観点から、きょうだい達はどのように障害のある兄弟姉妹と関わり、どんな人生を歩んでいくのかを明らかにすることである。本研究は、きょうだいがアイデンティティを自らの手で掴み取る生き方そのものに注目するという点において、新規性を持つと考えられる。個別性・主体性を尊重した考察を行い、障害者やその家族を取り巻く問題を浮き彫りにすることで、進路や将来の身の振り方に悩むきょうだい達にとっての、人生の選択の一助となればと考える。

本研究には、ライフストーリー・インタビューを採用した。個人の生 (life) を聴き取り、具体的な経験を、物語性（生の経験への主体的な意味づけ）を大切にしながら理解していこうというものである。筆者が「知的障害者の兄を持つ」「大学4年生」で「きょうだいの進路選択を卒業論文のテーマとしている者」だからこそ調査協力者が語ってくれた生の経験を多元的に考察するには、筆者自身の生についても自己再帰的に記述した。

本研究の調査から、以下のことが明らかになった。(1) 福祉職を始めとする障害者に関わる職業は、きょうだいにとって身近で理想的、模範的な進路選択ともいえるが、その道に進むことを決めた者には、模範的とされる選択肢だからこそ、「自分の意思で決めたのだ」と胸を張って言えるほどのアイデンティティが確立されていた。(2) きょうだいが抱く、障害のある兄弟姉妹を支える役割からの“自由”をキーワードにライフストーリーを紐解くと、きょうだい達は“自由”を求めた葛藤の先に自分だけの生き方を見出していることがわかった。(3) 兄弟姉妹に障害があると大人になってから知ったというきょうだいの語りは、“障害”の診断が、家族の形を変えるほどの力を持つほどのスティグマを負わせるという事実を浮き彫りにした。(4) きょうだいは障害のある兄弟姉妹との暮らしの中で、自分にとって適切な、自分が1人の人間になるための「距離」を模索しながら生きている。アイデンティティを構成する様々な軸を自らの意思で動かし、生き方を主体的に選び取ることが、きょうだいには求められているのである。

(指導教員 照山絢子)